

札幌大学総合研究 第2号（2011年3月）

〈書評〉

田中 幹子著
『和漢・新撰朗詠集の素材研究』

渡辺 さゆり

はじめに

田中幹子氏による『和漢・新撰朗詠集の素材研究』は、『和漢朗詠集とその研究』の続編である。

『和漢朗詠集』は、寛仁二年（1018年）の頃、当時の文化の牽引者である藤原公任によって、貴族の日常として口ずさまれたものや、公任が朗詠に適していると判断した漢詩句（五八八句）や和歌（二一六首）を、『古今和歌集』にならって、上巻四季部、下巻は雑で構成されている。和歌でもっとも多いのは、紀貫之の二六首、漢詩では白居易の一三五句であり、古今的世界の重視が見られる。

田中氏は、前書『和漢朗詠集とその研究』においてそれぞれの項目に公任の世界観が込められていると分析し、構成上の特徴を明らかにした。

本書は、『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』に採録された漢詩句や和歌に焦点をあて、それぞれの漢詩句や、和歌が両集に採録される以前に、どのように受容され、変容されていたのか、また、両集に採録されて以後、どのように享受されたのかを考察したものである。両集所収詩歌の素材に目をむけ、発想の基となった歌語や説話が漢籍を源としながら、いかに日本の変容を遂げたかを論じたものである。以下、各章の内容紹介をしていく。

第一章 素材からの考察

一 「霞」について

本項は、漢語「霞」と和語「かすみ」の意味の異なりを日本漢詩や和歌がどのように工夫して歩みよっているかを論じたものである。漢語「霞」は、主に紅い採光の意味であるのに対して、和語「かすみ」は、もやもやとした白い形状のものをさす。日本漢詩は景物の詠じ方を中国漢詩から学んでいる。その手本となる中国漢詩が専ら鮮やかな紅色を詠むのに対し、「かすみ」を白いもやもやと思っている日本人が漢詩で「霞」をどのように表

現してきたかを分析している。その結果、もやもやの意の「煙」の語と結んで「煙霞」と表現したり、「霞」の向こうに春の錦が広がっているのが透けているために結果として「霞」に色が等工夫され詠まれていることを指摘する。また、漢語「霞」は採光の意のため季節を問わないが、和語「かすみ」は早春の景物である。筆者は、このような和漢の差異を熟知していた公任が、『和漢朗詠集』の「霞」部を構成するために、中国漢詩句と日本漢詩句と和歌をいかにして調和をとろうとしていたかを読み取っている。日本の理解に基づき「霞」を春の景物として位置づけした上で、朝日が映ることで紅色を詠んだ「かすみ」歌を選び、漢語世界に近づける。日本漢詩の「霞」も色彩は漢語的な錦であるが、日本的に早春の景物として詠んだ道真の漢詩句を選んでおり、中国漢詩の影響を基本的に受けながらも日本の変容が見られることを指摘した。

二 「春の夜の闇はあやなし梅の花」歌の「暗香」について

「香り」は、『万葉集』ではほとんど詠まれなかったが、漢詩文の受容により『古今集』の時代には数多く読まれてきた素材であった。著者は和歌に影響を与えた漢語「暗香」という表現に着目し、この表現は、従来理解されてきた「暗い中での香り」ではなく、「ほのかに漂う香り」の意であることを明らかにした。また、紀貫之や躬恒がそのことをよく知りながら、あえて「暗」を「暗^{くら}い」の意で取り直して、白楽天たちが、詠まなかった闇夜に香る梅の香を詠んだと考察する。

三 「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草」歌の「鶉」について

藤原俊成の「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草」歌は、『伊勢物語』の深草の女「野とならば鶉となりて鳴きをらむ狩にだにやは君は来ざらむ」の話を本説とした歌として知られている。著者は、『伊勢物語』では、季節を規定していないのに、捨てられながらも男を怨まないでひたすら慕う女の話の舞台として、俊成歌が、秋の夕暮れを設定したことに注目し、そこに『和漢朗詠集』「秋興」部が影響していることを指摘している。この「秋興」部で鶉歌（万葉集歌）がとったことが、鶉を秋の素材として認識させるきっかけになったとする。『和漢朗詠集』以降、『後拾遺集』から鶉が秋の素材になっており、これらの影響を受け俊成が『伊勢物語』の深草の女の話の本説として「夕されば」歌が生まれたとする。

四 「冥きより冥き道にぞ入りぬべし」歌の「月」について

和泉式部の「冥きより冥き道にぞ入りぬべしはるかに照らせ山の端の月」歌は、法華経

化城喻品の「從冥入於冥，永不聞仏名」の一句の経題和歌とされているが、著者は、この歌が、法華經の教えを歌とした経題和歌の性格をもたないことを指摘した。また下の句「はるかに照らせ山の端の月」が、化城喻品ではなく、法華經如来寿量品の「從冥入於冥 永不聞仏名」の影響を受けていることを指摘した。

この歌は、法華經を直訳する経題和歌ではなく、和泉式部が敦道親王との恋愛を詠んだ「山を出でて冥き道にぞ辿り来し今一度の逢ふことにより」と発想を同じくしたものであり、和泉式部が、自分の「女としての業」への覚悟の心境を表現する手段として法華經の句をかりて表現している歌だと指摘する。

第二章 説話からの考察

一 『和漢朗詠集』所収詩句の説話的背景

この章は、二章以下の説話の影響歌に生まれた『和漢朗詠集』所収詩歌の受容や変容の過程をまとめたものである。

二 「老馬之智」説話

『韓非子』所収「老馬之智」説話は、戦いの最中冬道で進路を見失った際、馬の帰省本能に頼ることを思いつき困難を克服する話である。しかし詩歌に受容される時には、失った恋や厭世感のために、自分を馬に任せて行くという趣向に変容して受容されていることを指摘する。このように風流なものに変容された詩歌に対して、院政期の歌学書では『韓非子』が典拠であることが指摘され、詩歌が学問となっていたことを指摘している。

三 「子猷尋戴」説話

『世説新語』所収「子猷尋戴」説話は、王子猷が降った雪に興を感じて、夜中はるばる友人戴安道を訪ねていくのだが、ようやく門前につきながら突然「興が覚めた」と言って、きっぱりと帰ってしまうという彼の豪放磊落な性格を伝える説話である。しかし、詩歌では、豪胆な性格からの行為というのではなく、風雅な行為として変容されて受容されている。そしてこの説話も、「老馬之智」説話と同様、院政期の歌学書では典拠である『世説新語』が指摘され、詩歌が学問となっていたことを指摘している。

四 「鵲」をめぐる説話

鵲は、中国文学では、さまざまな場面に登場するが、日本にはいない鳥だった。日本人にとっては、中国文学から得た印象から鵲を想像し、鶴のようなものとして詠んでいる。

鵲をめぐる中国説話の中で最も人口に膾炙しているのは、『淮南子』や『歳華紀麗』所引『風俗通』などを典拠とする七夕の日に天の河に身を埋めて翼を違えて橋を成し、織姫を渡す鵲説話である。著者は、七夕の鵲の和歌に注目し、なぜ季節が晩秋から冬にかけて詠まれたかという疑問を持ち、そこに閨怨詩的世界を読み取った。

七夕説話は、和歌にも大きな影響を与えたが、日本漢詩には、この他、『神異経』を典拠とする「破鏡説話」が影響を及ぼしていた。この説話は、夫婦が別れる際、鏡を半分に割り、各々が持ち、元妻に新しい男が通おうとした際、半分の鏡が鵲に変化して元夫の許に飛んでいったという話である。

本項で著者は、これら鵲の説話の日本的受容として『和漢朗詠集』と『新撰朗詠集』の「七夕」部に詠まれた菅原輔昭や菅原忠貞の詩句が、この両方の説話を取り合わせた世界を詠んでいることを指摘し、それらの影響は、新古今以降の和歌にも見られることを指摘する。

五 「王昭君」説話―「みるからに鏡の影のつらきかな」歌―

王昭君説話とは、『西京雜記』などで知られる絶世の美女王昭君が、宮廷絵師に賄賂を贈らなかったために、醜く描かれ、匈奴の妻となったという悲劇をいう。古くから中国漢詩に詠まれ、日本にも受容された。著者は、従来解釈がはっきりしなかった『新撰朗詠集』「王昭君」所収の懷円法師の「みるからに鏡の影のつらきかなからざりせばかからましかば」歌が『和漢朗詠集』「王昭君」の白楽天の「愁苦辛勤憔悴尽，如今却似図画中」の影響を受けたものであり、「今の醜い姿のような絵姿にあの時描かれなかったら、今の私がこのようにあの時の絵姿とまったく同じ醜さにはならなかっただろうに」というものと解釈した。

六 「王質爛柯」と「劉阮天台」―中世漢故事の諸相―

本来別々なものである『晋書』等を典拠とする「王質爛柯」の故事と『蒙求』標題でしられる「劉阮天台」の仙境説話は、和歌や物語の中で同じ場面で用いられることが多い。その背景に二つの説話を一つの詩の中に詠みこんだ大江朝綱の『本朝文粹』巻十の詩序を典拠とする「誤入仙家雖為半日之客，恐歸旧里纔逢七世之孫」の詩句が、『和漢朗詠集』「仙境」部に収められたことが影響していることを明らかにした。

以上、内容の梗概を紹介した。著者の基本的な姿勢は、中国漢故事が素材が日本文学に強く影響を及ぼしていることを前提し、中国と日本の文化的差異の中で日本文学がどのよ

うに、選び取り、どう変容していったかを明らかにしようとしたものである。本著でとりあげた素材や漢故事の選び方が、総花的印象がいなめず、漢籍引用に返り点などの面で統一感が見られない点が残念であるが、今後とも研究を続け、さらに広い視野からの見解を述べられることを期待する。